

社  
SHA

楽  
RAKU

神奈川県立川崎図書館 が所蔵する  
全国有数の〈社史コレクション〉を  
さらに活用していただくため、  
社史の使い方や、社史の楽しさ、  
社史情報などをお届けしていきます。

Vol.50

2016/01

「社楽」50号、そして、四年目を迎えました。「節目には何を特集しようかな」と考えていたところ、「空想でいいので、社史担当が県立川崎図書館の年史を編纂するとしたら、どんなものにしたいかを書いてみたら」とリクエストされました。

2018年に当館は60周年を迎えるので「60年史」を刊行するという設定で考えてみます。開館からではなく、既刊の「50年史」以後の10年間を主な範囲として、「50年史」までの期間は略史でまとめることにしましょう。略史は冒頭ではなく、あえて本編の後に配置したいと思えます。

社史制作にあたっては「誰のための社史にするのか」が肝要です。公共図書館の性格上、広く皆さんに読んでいただけるものを目指したいです。せつかくなら、読んで楽しい内容にしたいと思います。この十年であれば、私も含め在籍している者も多いので、臨場感のある記述ができそうです。読みもの的なタッチで書きましょう。その手の文章は書き慣れていきます。

ただし、読みやすいから簡略でいいというわけではありません。当館は図書館界でもユニークな活動で知られています。そうした取り組みや成果は、図書館界の財産という位置づけにもなるので、きちんと書き残しておく責任を感じます。たとえば、

社史に関する企画・広報をはじめ、いくつかのプロジェクトをピックアップして詳述しましょう。プロジェクト編などを設けることを視野にいれます。

アピールしやすいサービス部門だけでなく、バックヤードを担当する部門の出来事も、なるべくたくさん載せたいので、部門編を設けたいと思います。職員名を出さか出さないかは、社史編纂の際に迷うポイントですが、当館では公共機関の性格から、コラムなどの囲み記事や特記すべき必要性があるものを除き無記名でよいと判断します。

組版は、読みやすさを考えて縦書きにします。「社楽」1号に、最近の社史は横書きが多いと書きましたが、縦書きの社史にはセンスのいいものが多いような気がします。ただいま縦書き復権中かもしれません。

# 社史担当が年史を作ったら

(表面から続く)

図書館の年史なので、いろいろな図書館の書架に並べられることをふまえて、サイズはA4判ではなく、手に取りやすいB5判か、それ以下を候補にしたいと思います。

当館には素敵な社史がたくさんあります。いろいろな社史を見ながら装丁やデザインを検討していきましょう。どうせ作るなら「へえ」と思ってもらえるようなものにしたいい気持ちはあります。

また、ちいさな出来事、エピソード、裏話などは、トピックスのページやコラムを随所に挿入して書き残しておきましょう。できる限り多くのスタッフの声を盛り込んでいきたいと思えます。「社楽」48号で「社員のコメント掲載法」を特集したので参考にしましょう。後年の読者に、今の図書館の雰囲気伝わるように心がけたいです。

口絵や挿入のカラーページでは写真を多用し、十年間の姿を紹介したいと思えます。イベントなどの写真に比べ日常の写真があまり残っていない、というのが課題になりそうです。

巻末の資料編は、ありきたりですが、統計や図表などを掲載します。ただし、数字の羅列だけではなく、数行程度のコメントや背景、分析は書き添えることにします。年表にも工夫の余地がありそうです。

さて、社史作成にあたっては、資料を集めることが重要になります。当館の場合だと、年度ごとの業績や統計をまとめた「要覧(事業概要)」がベースになります。書類や写真などは、パソコンのサーバーに入っているデータから必要な情報を探して、整理していくことになります。これは、けっこう手間がかかります。これは、規定にのっとって保存してありますが、保存対象外のものは残っていないものもあるでしょう。裏付けがとれなかったり、事情がわからなかったりする事柄も多そうなので、異動や退職をした当時の担当者にインタビューを行い、確認をすると同時に、記録もとっておきたいと思えます。記載事項の出典は、可能な限り欄外に注記します。編纂には、なるべく多くの職員に加わってもらいたいのですが、各部門から1名くらい代表で参加してもらおうのが現

实的かもしれません。小さくてもかわらないので専用のスペースがあれば効率的に進められるでしょう。さらに社史編纂をサポートする企業等と協力して作業ができれば、よりよい年史ができると思います。

気のはやい話ですが、年史を刊行しておしまいはなく、編纂の過程で得た資料や成果は、後世に引き継ぐと同時に、アーカイブズなどとして活用できるようにしたいと思えます。もちろん『神奈川県立川崎図書館60年史』ができるまで」の講演は開催させていただきます。

●  
以上、あくまで空想上のプランです。コストなどはまったく気にせず、思いつくままに書いてみました。いろいろな企業では、こんな感じでイメージをふくらませながら、社史を制作しているかもしれませんね。

売り物ではないので自由に作成できる部分も多く、担当者のアイデアが活かされたり、社風があらわれりするのも、社史の見どころです。

(科学情報課・高田)

●お問い合わせ先 神奈川県立川崎図書館 科学情報課

〒210-0011 川崎市川崎区富士見2-1-4 電話：044-233-4537

<http://www.klnet.pref.kanagawa.jp/kawasaki/index.html>